
女神の涙

沓葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神の涙

【Nコード】

N3615D

【作者名】

沓葵

【あらすじ】

妹を殺された兄。復讐をする。ある女性との出逢いから虚しさを知る。そして兄にとって女性はかけがえのない存在となるが……

復讐（前書き）

しょうしょうグロテスクな表現があります

復讐

```
- - - - - | NextPart | 59636 | 63684 |
67732
Content-Type: multipart/alterna
rtive; boundary" - - - - - | NextPa
rt | 53076 | 57124 | 61172 "
```

```
- - - - - | NextPart | 53076 | 57124 |
61172
Content-Type: text/plain; char
set" iso-2022-jp"
Content-Transfer-Encoding: 7bit
```

僕は絶対に許さないー
アイツをー アイツの友達をー
アイツの家族をー
全て壊してやったー 家も . . . 心も . . .
アノ人に出逢うまではコレが虚しいコトだなんて思いもしなかった .
.

高校の時、両親が事故にあった。そして、死んだ。
妹の静は泣いた。しかし俺は何故だか涙が出なかった。兄として泣
いている姿を妹に見られなくなかったからかもしれない。

両親の遺産が家や数年分の生活費はあったので、生活に不自由はし

なかった。

俺はバイトに励み、4つ下でまだ中学生だった静は家事をした。そのまま俺は大学へ進み、静も大学進学の意味を出した。

俺が大学を卒業し、働き始めた時、静はサークルに入り、それなりに楽しくやっているようだった。

しかし、そのサークルが惨劇のステージになるとは夢にも思わなかった……。

静はその夜、いわゆる部室のような場所に忘れ物を取りに行った。そこで、大学の先輩に当たる人が自殺を図っていた……。

静は止めた。元々正義感の強かった所があったからだろう。

その男は見られたコトで逆上し、静に襲い掛かり、殺した。

そしてソイツは自殺に失敗し、精神病院行きだった。

俺は泣いた。静が死んだその夜に、友人の野村千秋の家に行き、全てを話し、泣いた。復讐を誓った。

静の通夜をし、葬式をし、告別式をした。

俺はまともに立っていられる状態ではなかった。

親戚付き合いも両親が死んでからあまりしてなかったために、あまり人は来なかった。

俺は全てを憎しみに変えた。憎んで、憎んで、憎んだ。

俺は、復讐を実行した……。

最初に、静と暮らした家売り払った。

静が使っていたものを売った。唯一つ、俺があげた時計を残して.....。

```
- - - - - | NextPart | 53076 | 57124 |
61172
Content-Type: text/html; chars
et"iso-2022-jp"
Content-Transfer-Encoding: quoted-printable
```

```
|| 1B|| 24BK|| 24O|| 40dB|| 24K5V|| 245"
|| 24J|| 24|| 24|| 21 - - - - | NextPart
| 59764 | 63812 | 67860
Content-Type: multipart/altern
ative; boundary" - - - - | NextPa
rt | 55892 | 59940 | 63988"
```

```
- - - - - | NextPart | 55892 | 59940 |
63988
Content-Type: text/plain; char
set"iso-2022-jp"
Content-Transfer-Encoding: 7bit
```

そして、アイツが入院している精神病院に侵入し、雑巾を口に詰め、叫べなくしてから指を一本一本落とす、首にナイフを突き立てた。帰りに家を放火し逃走した。

それから今、全てを失い、放浪している。

```
- - - - - | NextPart | 55892 | 59940 |
63988
Content-Type: text/html; chars
et" iso-2022-jp"
Content-Transfer-Encoding: quo
ted-printable
```

```
 1B 24B 24 3D 247 24F 21 22% 2
2
% 24%D 24 ,F 7E 1 21 247 24F 24
24 24k 40 : ? 40IB 1 21 24K ? /F 7E
 247 21 22 ; ) 6R
 24r 8 7D 24K 5M 24a 21 226 + 24Y
 24J 24 / 247 24F 24 + 24i ; X 24r
01K 5C01K 5CMn
 24H 247 21 22
```

復讐（後書き）

まだ本題に入らないプロローグですね

出違い

「なあ、いいから俺んどこに来いよ。」

「イヤ、お前には絶対世話にならねえ。」

「俺にもお前の罪を少しは背負わせてくれよ！」

「ありがとう。でも、ダメだ。」

遠くから声が聞こえる感じ…………。

「ねえ。」ふと顔を上げるとそこには少し丸顔だが可愛い顔立ちをしている女の子がいた。いや、女の子というよりお姉さんか？

「事情は知らないけど、あなた、家、ないんでしょ？」

「ええ…………。」

「じゃあ家にアパート来たら？安いし、大家さん、良い人だし。」

俺達は少しキョトンとしてしまった。

「あなた達、名前は？あ、あと年齢も。」

「森 遥 24歳」「野村 千秋 22歳」

俺はとつさに、名前も歳も偽った。

本当は

「藤 葵 22歳」なのだが…………。

「遥君、行くの？行かないの？」

「行き…………ます…………。」

何だか有無を言わさない感じだ。

しかし、嫌な感じではない。

千秋は適当に理由をつけて帰った。

後で住所とかを教えろと言っていた。

彼女の名前は

「柊 小雪 24歳」Oしだという。

静も生きていればこんな感じになったのだろうか。

そう．．．．．生きてさえいれば．．．．．。

大家さんの厚意から、家はそこに決まった。

「遥君、家族は？」

小雪は悪気なく聞いた。

「いません。」

それ以外に何もいうコトが出来なかった。

俺は自分が悪いことをしたとは思っていない。俺は殺人鬼か？イヤ、違う。俺は正義の標だ。静を殺した悪に鉄槌をくらわせただけだ。

「いないって．．．．．」

「死にました。」

「そう．．．．．。よく今まで千秋君の手も借りずに頑張ったね。そういうと俺を抱きしめた。

暖かかった。久しぶりの人の温もりだった。

この人をこれ以上騙してはいけない気がした。

だけど．．．．．いまさら言い出すことも出来なかった。

「遥君、家賃や生活費はどうするの？」

「金は、遺産がありますから．．．．．。」

父と母の残したお金でまだ十分に間に合う。

静の生命保険金には手を付けていない。そしたら静の死を認めたいみ、俺には手を出せなかった。

「それならいいんだけど。」
小雪は、笑いながら俺を自分の部屋に入れた。そして、飯を出してくれた。
久しぶりの手料理。

温かかった。泣けてきた。

「ごちそうさま。小雪さん、ありがとう。」
そういうと、俺は小雪の部屋を出て、自分の部屋へ向かった。
あのままでいたら、泣き崩れそうだったから……………。

備え付けの小さなテレビをつけると、ニュースは全て俺のことだった。
た。

『非常に残酷な殺害方法に警察は怨恨の強い人物として、さぐつて
いると、被害者が錯乱し、殺害された 藤静さんの兄弟で藤葵さん
が行方不明になっていることから、藤葵さんを全国に指名手配する
ことに決めました。』

残酷？どつちが……………。アイツは自分の自殺を見られたから
静を殺したんだぞ？関係の無い静を……………。
だから俺はアイツを殺してやった。家も放火した。

そんな一日を思い出して、ぐるぐる……………ぐるぐる……………リピート
していたら、眠れなく、朝になった。

こんな日が続くと思ったら吐き気がした。
俺は間違っていたのか？

このまま死んでしまいたかった。
いや、恐らく小雪と出逢っていなければ手首を切っていたらろう。

絆／＼穏やかな日々

全く寝ずに過ぎた夜。朝飯をつくろつか迷いながらも何もやる気が起こらなかった。

「遙君、起きてる?」

小雪だ。朝早くになんだろうと思いつつも俺はドアを開けた。

「その部屋、まだ暖房入ってなくて寒いでしょ? 私の部屋に居たら? 私はこれから仕事だから。」

と合鍵を渡した。

「ハイ……………」。「やっぱり有無を言わせない感じ。」

昼頃に俺は千秋の家に行った。

外に出るときはサングラスを欠かさない。一応の変装だ。

千秋はやっぱり家にいた。今日も大学をサボったようだ。

千秋に全てを話した。小雪のこと。家のこと。俺の気持ちのこと。

千秋は黙って頷いてくれ、それでも力になってくれると言った。

俺はこんな親友を持って本当に幸せだと実感した。

二人でハンバーガーを食べ、下らない昔話をしていたとき、ベルが鳴った。

このベルが俺の運命を変えるなんて考えもなかった。

俺は簡単には玄関から見えない場所へ隠れた。

『ピンポン』

俺とも大学で友人だった本山のようだ。

「よお。今日もサボりだろ? 俺もサボりなんだけど、ちょっとPC貸してくんねえ?」

千秋は本山と俺が友人だということもあって、家の中に入れた。本山と目が合った。明らかにビビツタ顔。しょうがない。俺は殺人鬼なのだから。「よお……………」

本山はそれ以上何も言わなかった。

俺は千秋に別れを告げ、家を出た。もう全て話してあったから十分だろう。

帰り道

俺は夕暮れになるかならないかのオレンジ色の西日が入る河川敷を歩いていた。

後ろ姿がすごく静に似た女の子が前を歩いている。思わず叫んでしまった。

「静!！」

振り返らない。やはり違う人のような。しかし、何故かあきらめきれなくて、その人の肩をつかんだ。

振り返ると凄く似ていた……………。だけど、やっぱりどこか違った。

「すみません。人違いでした。」

「あの、その静って人、どうかしたんですか？」

「いえ、なんでもないんです。」

「そうですか……………」

話をしてみると、彼女は

「加藤 香奈」というOLの女性だった。

本当に似ていた。

俺はなんだか沈んだ気持ちになった。

夕方、小雪の部屋に居たら、電話がかかってきた。出てもいいのかと少し悩んだが、一応出ておくことにした。小雪からだ。

「遙君？雨が降ってきたから、会社まで傘を持ってきてくれない？俺は礼もあるから傘を持ち、サングラスをかけて小雪の会社へ向かった。」

小雪の会社はそんなに大きくない中くらい会社だった。

受付で小雪の名前を言うと、すぐに小雪は出てきた。

小さな声で俺に耳打ちしてくる。

「私、上司にセクハラされてるの……。何度かご飯とか誘われたんだけど、なんとか逃げてきて……。今日はちよつと逃げられない雰囲気だから、彼氏のフリしてくれない？迎えに来たって感じで！」

小雪には礼があるので断れない。それに、今日来たのだからおおよそ同じだ。

少し考えていると、そのセクハラ上司がやってきた。

「柊君。今日の食事の件、考えてくれたかい？」

「すみません。課長。今、雨が降ってきたので彼氏が心配して来ちゃったんです。今回は見送らせてもらえますか？」「君が柊君の彼氏かい？」

「ええ……。すみませんがウチの小雪が何度かお食事に誘われているようで……。コイツが居ないと俺の飯が危うくなるので、勘弁してもらえませんか？」

「君のご飯は毎日柊君が？」「ええ……。コイツの飯はものすごく旨いので。ほぼ毎日のように来てもらっちゃって……。」

「。」

ウソではない。ただし、すみ始めてからまだ二日目だが。

「そうかい。そりゃあ悪いことをしたね。」
「そういうと課長らしき人物は去っていった。」

なかなか爽やかなセクハラだと思った。

「ありがとう遥君。本当助かったわ。」

「これでコレ以降もあの課長は誘ってこないでしょう。俺が居なくなっても安心です。」

「遥君居なくなっちゃうの?」

「あ、いや、例えばってことですよ。しばらくはいるつもりですから。」

しまった、口が滑った。だが、まあ不自然じゃない会話だろう。何か感づいたらよっぽど勘の良い女だ。

帰り道の途中で急に小雪が話しかけてきた。

「ご飯、もう食べた?」

「いえ、まだですけど。」

「じゃあ食べていけない?」

「あ、俺……外で食べるのってあんまり好きじゃないんです。」

冗談じゃない。いつつかまるかも分からないのに外食なんて……。

「そうなの?じゃあ……材料買ってあたしの部屋で食べようか。」

「いえ、本当、大丈夫ですから。」

これ以上優しくされたら、離れられなくなってしまう。そんなことは失ったときの悲しさを知っているから、絶対に避けたかった。

「遥君、今日、何食べた？」

不意をつかれた．．．．．普通に答えてしまった。

「えと．．．．．千秋んちでハンバーガーを一つ．．．．．」

「ホラ、まともに食べてないんじゃない。そんなんじゃない、体壊すよ。」

「ハイ．．．．．」

なんか、逆らえない。いつの間にか、俺はこの人を必要としているのかもしれない。

こんな穏やかな日常もいいかもしれない．．．．．

けど、絶対に心を許してはいけないと心に誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615d/>

女神の涙

2010年12月14日18時28分発行